

# What is “Beauty Studies”?: Reconsidering Its Scholarly Significance

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): beauty studies, fashion studies, the human body, modern knowledge 作成者: KAWANO, Saeko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4292">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4292</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 「化粧学」とは何か —その学術的意義について再考—

学芸学部 化粧ファッション学科 川野佐江子

**要旨:**「化粧学」とは何か。本論の目的は、大阪樟蔭女子大学にて化粧が明確にカリキュラム化されて10年目にあたり、新学問領域として提唱してきた「化粧学」について、改めてその意義を確認してみようというものである。まず、化粧を学問の俎上に挙げるために研究者はどのようなプランニングをしたのかを明らかにする。つぎに、そのプランの実践として大阪樟蔭女子大学における化粧に関連するカリキュラムを時系列で追うことで、化粧学設置までにどのような経緯があったのかを調査する。そして、改めて化粧学が包括する学問領域についてその可能性を探る。最後に、化粧学が学問としてその根底に何を含んでいるのか、近代知への疑義とともにあるポストモダンの思想について依拠しながら論じる。また、美が持つイデオロギー性に着目しつつ、人が美に翻弄されそれを求め続ける存在であることを理解し、美が人々の生活といかに関連しているか、豊かにしているかを既存の学問領域を縦断横断しながら検討していく必要性について述べる。

**キーワード:**化粧学 被服学 身体 近代知 美

## はじめに

「化粧学」とは何だろうか、それはすなわち「化粧とは何か」という問いを含んでいる。『化粧学』のすすめ(深作、1982)の冒頭には、化粧文化研究の第一人者であり、後に大阪樟蔭女子大学で化粧文化について教鞭をとることになる村澤博人とのエピソードが紹介されている。

数ヶ月前もまえのことである。編集の村澤博人氏と話をしているとき、「化粧学」という構想はできないでしょうかと言われた。ぼくは「化粧学？」と思わず聞き返した。世界のどこの大学にも、いまだ「化粧学科」などない。また先駆的に「化粧学科」を新設したとしても、既成のどの学部にも所属させていいのか、どうにも見当がつかねる、水と油のような自然科学系列のものと人文科学系列のものをどのように組み合わせる機能させるか、これも大きな課題である。ぼくは「むつかしいですね」と、遠まわしにその時はお断りした。(深作、1982:1)

しかしこの後深作は、『化粧学』という今までまったく開拓の領域の開拓に、たとえ試行錯誤をともなう先駆的仕事にせよ、文化人類学者のぼくが、は

たして挑戦できるか。自然科学に自信がない。しかし、誰かが勇気を持って始めていい仕事だから、むしろ外部の人間がバイオニアとなって試案をつくり、内部の人間に検討討議してもらうのも一案だ(深作、1982:1)と考え直す。そして『化粧学』のすすめにおいて、「I “化粧” の概念の変更の必要性」「II “化粧学” を形成させるために必要な六つの部門」を示している。前者は“化粧”の定義についての再考を促す内容である。化粧が単に顔を彩るモノであるだけでなく、そこにある文化人類学、歴史学、社会学、心理学、さらには動物学などからアプローチされる広義の化粧について述べ、化粧の意味が指す広域性を説明している。

つぎに後者については、化粧を学問の週上に上げるため、つまり「化粧学」を形成させるための試案を述べている。

“化粧”を現代的に考えると、“化粧”の概念の変更が必要である。では、どのように変更するべきか。それを一言でいうと衛生学・薬学・生理学・医学・化学などの自然科学から心理学・社会学・美学などの人文科学に至る諸分野に至る学問を動員してこそ、現代の“化粧”を捉えることが可能だ(深作、1982:8)

そして深作は、「この『化粧学』なるものを創設するにあたり、参考になるような性格的に近似したものが既成の学問の中にあるとすれば、それは家政学であろう。」(深作, 1982:8) と続ける。

このように深作が「化粧学」についてのパイオニアを模索してからすでに 35 年を経えており、現代の化粧をとりまく環境は、人間を取り巻く環境に沿って大いに変化したといえるだろう。とはいえ情報化、グローバル化やダイバーシティが叫ばれる現在においてもなお、化粧が女性特有のものであるとか、流行を伴う軽佻浮薄な存在であるとか、あるいは皮膚だけの表層の問題であるとか、顔に彩色する刹那的な物であるだとか、というような既存の認識は変化したのだろうか。

ここでは、生活世界を踏まえた学問対象として化粧を捉えるにあたり、大阪樟蔭女子大学における化粧学をカリキュラムから振り返り、改めて「化粧」と「化粧学」についてその意義を考えてみたい。

## 1 大阪樟蔭女子大学における「化粧学」の変遷

それではまず、大阪樟蔭女子大学における化粧学がどのようにカリキュラムされてきたのかを、大阪樟蔭女子大学被服学科の学則の変遷から見ていくこととする。

### 1.1 「化粧学」前夜

まず、大阪樟蔭女子大学の学生便覧と講義要項をさかのぼると、カリキュラムに「化粧」という言葉が初めて使われたのは、平成 15 年(2003 年)度であることが分かる。この平成 15 年(2003 年)からは、学芸学部被服学科にアパレルコースとインテリアコースが設置された年度でもあるが、この被服学科のカリキュラム表に「衣生活文化」という項目が立ち、その中に「顔と化粧の心理学(講義 2 単位)」、「身体装飾論(講義 2 単位)」、「化粧文化論(講義 2 単位)」という 3 科目が登場している。これが、化粧に関する科目のはじめである。ここではまだ「化粧学」という表記は現れていないが、上述 3 科目は、現在の大阪樟蔭女子大学の化粧学専攻科目に残る、あるいは連なる科目である。このことは、この後説明する。

さて、「顔と化粧の心理学」、「身体装飾論」、「化粧文化論」は、翌平成 16 年(2004 年)に被服学科からインテリアコースがインテリアデザイン学科として独立した後も、被服学科科目に残り、「衣生活文化」領域科目として置かれている。

ところでこの「衣生活文化」というカリキュラム区

分名称だが、この名称は被服学の学問領域大系を基盤とした名称である。この年平成 16 年(2004 年)のカリキュラム表では、順番に「材料学」「加工・整理」「企画・造形」「アパレル生産」「衣生活文化」「流通・消費」「環境」「被服学全般」「インテリア」「ゼミ」「教職関係科目」という科目区分になっている。特にここでいう「材料学」「加工・整理」「企画・造形」「アパレル生産」「衣生活文化」「流通・消費」「環境」までの名称は、被服学領域における伝統的な体系を基に、表記を工夫したものであると考えられる。被服学はそもそも自然科学領域と人文社会学領域の複合学問領域であり、それはすなわち研究対象である被服それ自体が、従前の縦割り式の学問区分だけでは漏れ落ちてしまいかねない、生身の人間の営みと密接に関連しているためである。したがって、大阪樟蔭女子大学被服学科のカリキュラムをさかのぼると、被服学をどう捉え教育するかという当時の教学の苦心がうかがえる。たとえば、さらにさかのぼって平成 12 年(2000 年)までの被服学科カリキュラム表には、順番に「総合」「衣生活学」「被服材料学」「被服生理学」「被服構成学」「意匠学」「被服心理学」「衛生学機構学」「演習」「教職関係科目」と並んだ区分が示され、それぞれの科目が設置されている。それが翌年平成 13~14 年(2001~2002)年には、順番に「学科基礎科目」「学科基幹科目」「学科発展科目」「関連科目」という区分に変更されている。おそらく従来の被服学区分を超えて、複合領域の広域性を強調する狙いがあったのかもしれない。しかしこれも平成 15 年(2003 年)度にアパレルコースとインテリアコースの誕生とともに、順番に「材料学」「加工・整理」「企画・造形」「アパレル生産」「衣生活文化」「流通・消費」「環境」「被服学全般」「インテリア」「ゼミ」「教職関係科目」という科目区分になり、被服学の領域名称に戻るのである。これはおそらくより学術的専門性を強調する狙いがあったのかもしれない。そしてまた 2 年後の平成 17 年(2005 年)のカリキュラム変更では、平成 13 年(2001 年)にならぬ、「学科基礎科目」「学科基幹科目」「学科発展科目」「関連科目」という区分に戻される。以降、現在に至るまでカリキュラム表の科目区分では被服学大系の基づく名称は使用されていない。

こうした被服学のそもそものあり方を模索するような動きと連動するようにカリキュラム変更が行われる中、平成 17 年(2005 年)度のカリキュラム変更で、化粧に関する科目で新たな動きが見られる。それは、「顔と化粧の心理学」が「装いと化粧の心理学」と名

称変更を行っていることである。これは、人がよそおう心理が化粧や顔に限られたものではなく、被服分野も包括するものとして再構築されたことを科目名称に表している。つまりこの名称変更は、化粧と被服がそれぞれ個別の研究対象として存在するのではなく、同じテーマの研究対象として包括できるという可能性を意味しており、被服と化粧が並列して存在することも意味していると言えるだろう。つまり、被服学の一部である化粧から、被服と同列、あるいは類似した研究意義をもつ存在になりえることを表しているとも言えよう。その結果カリキュラムでは、「装いと化粧の心理学」は「学科基礎科目」に配置、「化粧文化論」は「学科基幹科目」として配置、そして「身体装飾論」は「学科発展科目」として配置された。

## 1.2 「化粧文化専攻」の登場

被服学科カリキュラムの変遷は、アカデミアが従前の領域群に特化するだけでは現代的諸問題が解決できなくなった状況下であって、文科省や国公立大学をはじめとした各所で学問領域の再構築が開始されている状況を反映しているだろう。その模索の中で、平成19年（2007年）度のカリキュラム変更で被服学科にはじめて「化粧文化専攻」という化粧に特化した科目を配した学びが示された。このとき被服学科は「アパレル専攻」「化粧文化専攻」と分けられて、それぞれに必修科目や必修選択科目などが設定された。このことは、目に見える形で「化粧を学問として取り上げる」ことを明示したものと言えるだろう。

この新しい「化粧文化専攻」では、化粧についての科目も大幅に増設されている。それ以前よりあった講義科目3つ（「装いと化粧の心理学」、「身体装飾論」、「化粧文化論」）に加え、「メイクデザイン論」「顔学概論」「化粧の歴史 A/B」「化粧品科学」「身体美学」「美粧と社会」「化粧文化特論 A/B」という講義科目が10科目増設された。また、特筆すべきは講義科目だけでなく演習科目の設置である。「メイクデザイン実習Ⅰ～Ⅳ」「ネイルアート実習」「顔・スカルプチュア」「エステ論（実習含む）」「ヘアスタイリング実習」という8つの科目が設置された。他の新設科目も含め、平成29年（2017年）度のカリキュラムにも残る多くの科目がこのときに設置されている。

この平成19年（2007年）度のカリキュラム変更で、先に述べた深作が「化粧学」のすすめ」で記したような、化粧文化部門での「化粧文化論」「化粧の歴史」「美粧と社会」「身体美学」など、化粧構成部門での

「メイクデザイン論」「メイクデザイン実習」「ネイルアート実習」「エステ論（実習含む）」「ヘアスタイリング実習」など、化粧材料部門としての「化粧品科学」などという、人文社会学と自然科学とそれらに根ざした実践という大枠がそろい、被服学の体系にならいつつ新たに相互に横断するようなカリキュラムが提示された。この平成19年（2007年）度の方向が、直接平成29年（2017年）度現在のカリキュラムの基盤となっているといえるだろう。

## 1.3 「化粧学専攻」の設置

平成19年（2007年）度のカリキュラム変更で化粧を学ぶことが宣言されたような形になった後、平成22年（2010年）度にはさらに大きな変更がなされた。それは、そこまで「アパレル専攻」「化粧文化専攻」と区分されていた被服学科に、あらたに「被服学専攻」「化粧学専攻」という2つの専攻が設置されたことである。専攻名の「アパレル」は「被服学」という伝統的学問名称に戻されて、その領域の広さを強調した形となった。一方「化粧文化」は「化粧学」という全く新しい名称を使用することになった。そしてこの「化粧学専攻」はさらにその下に前カリキュラムを踏襲し新たに再構築された「化粧文化コース」と、美容師国家資格を取得することを目的の1つとした「美容コース」を持ち、その学びの内容が区分されることになった。

以上のように、大阪樟蔭女子大学において、科目名に「化粧」が登場したのが平成15年（2003年）度の学芸学部被服学科のカリキュラムであり、「化粧文化専攻」として被服学と並んで学びの柱の一方になったのが平成19年（2007年）度であった。そして、平成29年現在の「化粧学専攻」の形になったのは、平成22年（2010年）度からであった。

## 2. 化粧学が包括する領域

### 2.1 学問それ自体の問題

以上見てきたのは、新たな学問対象としての化粧を、いかに体系立てアカデミアの週上に乗せるかの実践としてのカリキュラムの変遷である。しかし、当然のことながら大学を運営していく現場でもある実践の場においては、いまなお完成形となっていないのが現実であろう。そこでここでは、改めて理想として化粧学が包括しようとしている学問領域について検討してみたい。

ここで確認しておきたいのは、「化粧学」とは「身

体の美、身体を表象を問題にする」ということである。化粧学の中で取り扱う身体とは、自然科学分野が取り扱う生理学的な対象でもあり、人文社会学分野が取り扱う哲学的・歴史学的・文化人類学的・社会的・心理学的・芸術的などの対象でもある。しかし一方で、このような既存の学問に固執した方法論だけでは、身体の問題は網羅できないことも特徴でもある。つまりたとえば、「人はなぜ化粧をするのか」という問いについても、自然科学からのアプローチでは、紫外線など刺激物から身体を保護する目的であると述べることも可能であり、人文社会学からのアプローチでは、自己をいかに社会に位置づけるか、位置づけたいかというアイデンティファイへの欲求である、と述べることも可能だ。そして実社会においてこの化粧をする行為には、今述べた二つのことは、同時に身体において生じていると言うことも可能だろう。言葉としての「化粧」には、たとえば「化粧板」「化粧金具」「化粧まわし」のように、必ずしも人間の身体を対象としていない場合もある。これらの場合の「化粧」は、「化粧」「化粧」などで意味されるような物質の表層を飾る・整える・化けるという意味で使用される。しかし、「化粧学」が究極的に対象とするのは「人間そのもの」である。そしてその人間はけっして表層的な存在ではない。人間は皮膚によって包まれた物体であるが、それはただの物体ではなく刺激に対する知覚や反応を持ち、「わたし」を主張したい欲求を持ち続ける一つの「身体」なのである。

これまで学問それ自身が世界をどう腑分けするかを問い続けた結果、さまざまに名付けられた学問領域が誕生している。その結果は、たとえば日本学術振興会が科学研究費助成事業で示す学問領域の「系・分野・分科・細目」を見ればよく分かる。細目が増える一方で、2017年度ではその分類が見直され再構築されたことは周知の通りである。またすでに複合領域や統合領域、新領域などが設定されているが、これらが示すことは、学問研究は常に問いを探し続ける駆動体であるということである。あらゆる方向から様々な方法でアプローチすることで新たな問いの発見が可能となる。そういう学問それ自体が抱える課題とともに、化粧学は存在すると言えよう。事象を理解するためには、区分し分析するのが定石であるが、区分することで明確になる事象がある一方で、そこから漏れるものを取り残す、排除する、放置する、あるいは無いものとする、という状況を生む。そういう意味では、化粧があまりにも日常的な事象であったため「問い」として見立て

られることがなく、実は多方面から分析可能であり、同時にそれらを統合領域からも分析可能である、ということが見過ごされてきたわけである。

以上のような学問それ自体が抱える課題を踏まえ、化粧学は実際にどのような学問領域を包括するか述べてみる。矛盾することにならざるを得ないが、便宜上既存の学問領域で示してみたいと思う。

## 2.2 人文社会学領域から

まず、人文社会学領域から化粧は、次のような分野から論じることが可能であろう。たとえば美学が挙げられる。美学は哲学の一部であり「美とは何か」という美の本質について、「何が美か」という美の基準、そして「美は何をもたらすか」という美の価値についてなどを思考してきた。すでにギリシア哲学にも見られる問いであり、近代ではカントやヘーゲル、近代以降ではアドルノなど多くの哲学者たちがその思索を深めている。

美学が伝統的なアプローチ方法を持っているのに対し、同じ哲学から現象学的身体論を挙げておく。現象学は、現代の我々が当然のこととして受け止めている根本である近代知に対する疑義から生じている理論を含んでいる。この近代知への疑義については後述することとするが、たとえば「人はなぜ化粧をするのか」という問いに対し、「身体を使って「わたし」のイメージを自他関係の中に出現させるため。しかしその際の「わたし」に「能動性」はない。人は化粧を自ら行うように考えるが、それは他者との関係の前に仕向けられる現象に過ぎない。同時に「わたし」はイメージでしかない。」と応えることが可能だ。つまり、近代的構築物なるモノ、例えば「わたし」への批判的捉え直しが可能となるのである。

化粧のもつ観念性を踏まえつつ、一方で現代の具体的事象について積極的に検討を加えていこうとするのが社会的アプローチになるだろう。また、現象だけではなくモノ（史料）を中心に化粧に注目すると歴史学からのアプローチも可能である。「化粧」という言説に注目すれば、言語学や比較文学、身体加工の社会問題については法学からも、または化粧業界や商品としての化粧に着目すれば経営学や経済学などもその領域に入るだろう。

また、ある意味で伝統的化粧へのアプローチとして文化人類学が挙げられる。それは祝祭や通過儀式で行われる化粧や、入れ墨、瘢痕などの身体装飾などを含み、それらは化粧学的重要な分野である。

### 2.3 自然科学領域から

自然科学から化粧品にアプローチするならば、まずすぐに考えられるのが化粧品の開発であろう。当然のことながら、化粧品は肌に直接関わるものであるから、皮膚科学も重要な領域となる。ただ化粧品を開発するだけではなく、そこにはどのような化粧品が必要とされているのかという消費者ニーズが背景となるが、それに向けて薬学や生理学などの側面からも具体的な化粧品が開発されることになる。その消費者ニーズは、審美的な正確なものばかりではなく、肌や老化現象、紫外線、保湿など人間の身体に直接関与することも含まれる。

また清潔観念に基づいた石鹸やシャンプー、メイク落としなども、この分野での開発が盛んである。

その延長にあるのが、医療からの化粧品へのアプローチであろう。それは肉体的な問題だけでなく、精神的な問題も含んでおり、非常に現代的な課題である。つまり外科的処方、内科的処方、そして脳科学や精神的処方が、病理でも臨床でも行われているということだ。

### 2.4 芸術・技術の領域から

この領域から化粧品へのアプローチが一般的にはイメージしやすいのかもしれない。それは、化粧品と審美性は、非常に関連しやすいからだ。人は美しくなるために化粧品をし、化粧品をすることは外見の問題を解決する、と考えているだろう。

たとえば、流行の化粧デザインや、化粧方法が挙げられる。シーズンカラー、眉の角度、口紅の色や質感や形、アイメイクの傾向やシャドーの色、立体感や肌質なども、その時流に沿った審美的基準によって、顔の上でデザインされていく。また、日常を離れた一つのアート作品としての化粧展示やパフォーマンスも含まれる。ある意味、最も華やかで最も感覚的であるゆえに、最も化粧のイメージを想起させる分野であろう。言い換えれば、この分野が一般的な化粧イメージを構成してしまっているとも言える。したがってこのイメージの強力さが、社会一般の想像する化粧が刹那的な感覚的なものでしかなく、実はそこに社会的意味や学術的意義を含むのだと言うことを隠蔽してしまうパワーも持っていると言えるだろう。このことは、大阪樟蔭女子大学の化粧学専攻を志望する高校生たちの多くが「メイクアップ・アーティストになりたい」と語り、化粧学が持つ広がり当初はあまり気がついていないことから伺える。

### 2.5 複合領域、総合領域から

そもそも現代における化粧品は、複合領域、総合領域からこそアプローチしやすいと考えられる。これまで述べてきたように、化粧品はあまりに日常的具体的な事象であるため、学術的に全方向的からのアプローチが可能だからだ。その中でも、たとえばジェンダー論から化粧品を検討することは、まさに現代的課題のひとつである。先にも触れたが、化粧品は女性特有のものとして扱われることが多い。しかしそれは、近代以降に男性性の表象が外見ではなく内面としての精神性に求められるようになった時に、外見を飾る化粧品は女性特有のアプリオリなものだとされたからである。近代以前つまり封建社会においては、男性も女性と同様に白粉と紅を使った化粧を施し、服装も女性以上に装飾的なものであったことは歴史が示している。男性と女性という二項対立構造と、性役割を固定化させることによって、近代社会の制度は確立されていった。しかし、現代に至りそれらの価値観や制度そのものが崩れ始めているのは指摘されているところだろう。男女共同参画社会が推奨され、女性の社会進出が期待され、女性へのセクシャルハラスメントが認識されはじめ、女性の地位向上がムーブメントのなあって久しい。ムーブメントが消滅しないのは、根本的解決がなされていない証でもあるが、一方で男性の置かれている状況はその社会問題にもならず過ぎてきたのである。女性問題を中心に議論されてきたジェンダー論は、現在新しい局面を迎えており、性差その区分自体をどう考えるのかということも課題となっている。化粧学においてもこれをジェンダー論で検討するならば、男性の化粧という現象や、LGBTの人たちにおける化粧行為についても研究対象となり得るだろう。その中で、化粧品で身体を装飾することが、性差とどう関係しているのか、あるいは化粧という個人的問題が社会的行動とどのように連関するのかなど、様々な方法で検討可能である。

またこの領域では心理学の方法論も有効といえるだろう。心理学はそもそも人文社会学系と自然科学系の両方の領域に渡る位置にあり、そういう意味では幅広い研究が期待できる。とはいえ実験系方法論と臨床系方法論では当然のことながらその方法論は異なる。しかし、人の心理をデータで捉え分析しようとする方法は、それぞれ具体的な場で有効であろう。たとえば、錯視による日常の化粧効果の数値化、福祉現場での化粧施術により心理効果の数値化などはその例である。

以上、とりあえず既存の学問領域を援用する形で、化粧学としてアプローチ可能な領域を述べてきた。た

だし、ここで並べた領域や分野が化粧学の全てではなく、例示のいくつかでしかないことは明示しておく。先にも述べたとおり、化粧学はその性格から、既存の学問領域を横断し、縦断し、その中でまた新たな学問的意義で分析研究されるのである。

### 3. 化粧学が見据えるもの

これまで化粧学が具体的にどのような学問領域で活かされるかを述べてきた。ここでは、これまでの議論を踏まえ、何故今化粧学なのか、化粧学成立の背景に何があるのかを述べてみたい。

2. で述べたように、化粧学は究極的には「身体の美や身体表象について、を問う目的」を持っているが、身体を扱うこと背景には、近代知への疑義が含まれている。フーコーの『言葉と物—人文科学の考古学』では、近代アカデミアがいかに体系化されてきたかということが述べられている。たとえば、ルネサンス期は類似性を原理とした知によって世界は解釈され、後の博物学は大量の収集の後にそれを秩序の中で分類することで世界を解釈しようとした、などである。フーコーらポストモダンの思想が指摘したのは、アプリアリなもとして確信されてきた近代知の分析であり、疑義であった。ポストモダンの思想は、いわば「知」の大変貌としてある種のパラダイム転換を要求することになる。そのキーワードは次の4つだろう。

#### 3.1 二元論から一元論へ

まず初めのキーワードは「二元論から一元論へ」である。これまでモノやコトなど未だ理解できないことを理解するには、フーコーが指摘した博物学のように、秩序立てて「分類する」という方法がとられてきた。新たに発見した植物や動物が分類されていくのと同じだ。分類の結果は誰が見ても理解できるものにするのが重要となるため、結局は最大公約数で分類作業が行われることになる。つまり、普遍主義を好むことになる。普遍主義の前提には、全人類には揺るがない共通項があるという確信が含まれており、それはデカルト以来のコギト命題への確信でもある。コギトの命題—我思う、故に我在り—は自然科学の哲学的基盤となる経験論を支え、産業革命と共に発展していく近代と近代知の確信となっていく。二元論は非常に分かりやすいため、すぐに浸透していく。その近代的二元論は、善—悪、聖—俗、男—女、理性—感情、精神—肉体、健康—病気、文明—野蛮などの区分を作っていた。しかし、確固たる自己から始まるコギトの命題はその

矛盾として指摘された「わたし」が死んでも世界はそのまま存在するという事実には応えてこなかった。そうした中、二元論からの脱却としての一元論が注目されるのである。

#### 3.2 分析原理から統合原理へ

次のキーワードは「分析原理から統合原理へ」である。17世紀のデカルトは、『方法序説』で、真理の探究をするには対象を必要なだけの小分類に分割することを述べている。これは近代科学の方法論を基礎づける影響力を持っていた。この分析原理 analysis では限界が生じた現代の科学の方法論では、小分類を再帰的に捉えようとシステム思考—体系思考—が採用されている。それが統合原理 synthesis であり、

#### 3.3 意識（理性）から言語（構造）へ

3つ目のキーワードは「意識（理性）から言語（構造）へ」である。20世紀になって新たな知の変貌の中、人間の意志は言語という“道具”以前によって存在するのではなく、あくまでも言語という“構造”に従属的なかたちで存在しているにすぎない、という構造主義が登場する。またそれは記号論を背景に、言葉は意志伝達の“道具”ではなく、端的に人間の意志の“構造”であると言い換えることもできる。つまり、人間の理性は言語でのみ理解され、言語外の存在を理解できないモノとして排除してきたことが指摘される。理性で理解できないモノとは、自分の意志とは関係なく反応する身体であり、感情である。したがって理性で抑制できないこれらを不浄であり、耐えがたいモノとして排除隠蔽してきたのであった。

#### 3.4 自我から共同体へ

最後のキーワードは「自我から共同体へ」である。以上のように見てくると、近代知がその根拠にしていた自我自体が本当に主体性をもって存在しうるのかという疑義を生むことになる。また、自立した自己であることが求められるデカルト以降の世界において、自ら全てを律し、自己責任に徹する日々は、一方で厳しく自分を管理しなければならず非常に不安定でもある。同時に経済格差を生む現状の中、自我の主張とは反する形で緩くつながる共同体を模索する傾向も見られようになっていく。このような東日本大震災後の「絆希求」のムーブメントや、SNSなどの新しいコミュニケーション方法など、さらに検討が可能である。

### 3.5 化粧学と近代知

3.1～3.4で、近代知の限界について簡単に述べてみた。これを基に化粧学を見ると、化粧学が見据えるものを示すことができる。まず、二元論から一元論への移行は、近代知そのものであるアカデミア自体が、人文社会学と自然科学という二元論の中にすでにあることを踏まえている。これを近代アカデミアと呼ぼう。その上で、二元論的近代アカデミアのままでは、化粧現象の全体像を捉えることができないとなったとき、化粧学は二元論的思考を止め一元論かつ3.2で述べた統合原理を用いることで、それに対処しようとしている。

また、3.3の構造主義的思考からは、化粧の意味が問い直されることになる。たとえば化粧の目的を問われた際に、「自分らしさを表現する」とか「自分が美しくあるために」という言説が見られることがしばしばある。一見これを見ると、化粧とはしっかりとした「自分」が意志を持って行われているかのように理解されがちであり、この応答になんの不備も感じない。しかし、よくよく考えてみれば「自分らしさ」や「美しさ」がそもそも何であるかという具体性がないまま、それらが形式化されていることに気がつくのである。結局化粧する理由を問うことで、「自己」や「美」という近代的概念の根拠や具体性のなさを暴露することにつながる。そしてそれは次の3.4の「自我」の不確かさを理解させることにもなる。

このように見てくると、化粧学は近代知の様々な問題点を加速度的に明らかにしていく触媒とも言えるだろう。したがって換言すれば、化粧学は、人を、社会を、世界をどう捉えるか、という壮大な問いを見据えていることになるのである。

#### おわりに

本論では、化粧学とは何かについて、まずは化粧学を提唱した村澤博人の依頼に応えた深作光貞の「化粧学」体系の試案を紹介した。次にその試案の実践の一つである大阪樟蔭女子大学における化粧の学びの変遷を追い、被服学に依拠した化粧学をいかに構成させるか苦心していた様子が理解できた。そして次に化粧学領域の学術的可能性についてまとめてみた。さらに、その化粧学領域の広さや深さが、近代アカデミアにおいてどのように位置づけられるのか、同時に近代知の限界について触れることで、化粧学にはその根底にどのような意義があるのかについて述べてきた。

ところで、化粧学は身体の美や身体表象についてと

り扱う学問だと述べてきたが、その際もっとも注意すべきは「美のイデオロギー化」に荷担しかねない危うさを持っていることである。化粧学は近代知の限界を知った上で、二元論に基づく単純な二項対立構造や、素朴な経験論に基づく近代自我への無防備な確信や、“理解できないモノ”を排除し隠蔽することについて、敏感であるべきものである。つまり、「美とは〇〇である」という美の基準化は、「美」と称されたモノ以外を排除する差別を生み、「美」の普遍性・中心主義を増幅させ、自由な発想や営みに制限を課すイデオロギーになりかねない。さらに言えば化粧学は、流行の美を追ったり、これが正しき美であることを示したりするものではなく、むしろ、こういった美が持つイデオロギー性に着目しつつ、人が美に翻弄されつつもそれを求め続ける存在であることを理解し、美が人々の生活といかに関連しているか、豊かににしているかを既存の学問領域を縦断横断しながら検討していく必要性について論じられるべきである。したがって、化粧学がとりあつかう「美」とは、諸刃の剣であることを認識した上ではじめて近代知を超える可能性を持つと言えるだろう。それらを踏まえ、今後の化粧学の研究に繋がっていかねなければならない。

#### 参考文献

- 深作光貞, 1982, 「「化粧学」のすすめ」『化粧文化』 No. 6 : 1-11.
- 吉見俊哉, 2011, 『大学とは何か』岩波新書
- Foucault, Michel, 1966, *Les Mots et Les Choses*, Tokyo: Editions Gallimard (=1974, 渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物—人文科学の考古学』新潮社)
- 日本学術振興会, 2017, 『研費パンフレット2017』
- 大阪樟蔭女子大学, 2000-2003, 『大阪樟蔭女子大学学生便覧』
- 大阪樟蔭女子大学, 2006, 『大阪樟蔭女子大学講義要項』
- 大阪樟蔭女子大学, 2009, 『大阪樟蔭女子大学講義要項』
- 大阪樟蔭女子大学, 2013, 『大阪樟蔭女子大学講義要項』
- 大阪樟蔭女子大学, 2017, 『大阪樟蔭女子大学講義要項』



## **What is “Beauty Studies”?: Reconsidering Its Scholarly Significance**

Faculty of Liberal Arts, Department of Beauty and Fashion Studies  
Saeko KAWANO

### Abstract

What is “beauty studies”? This paper investigates the scholarly significance of this topic. Osaka Shoin Women’s University has offered a curriculum in beauty studies for 10 years, in which time it has proposed new avenues of research in this area and sought to reaffirm the significance of such study. The present paper first aims to assert a planning process of beauty studies curricula. It then provides a chronological examination of beauty studies at Osaka Shoin Women’s University. This is followed by an examination of potential academic disciplines for inclusion among beauty studies. The paper also addresses what should be included in the foundations of beauty studies with regard to questions raised concerning present-day knowledge in line with postmodern thought. Additionally, it focuses on the ideology of aesthetics and recognizes that people are concerned with matters of beauty and have a strong desire for beauty, and a cross-cutting perspective on the necessity of beauty studies is provided.

Keywords: beauty studies, fashion studies, the human body, modern knowledge